

《資料》

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（七）

— 31真木柱香・40御法香 —

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二） 1桐壺香・6末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三） 7紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四） 13明石香・18松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五） 19薄雲香・24胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六） 25蛩香・30藤袴香」（『社会科学』第44巻第4号、二〇一五年二月）の続編として、31真木柱香から40御法香までの十の組香のうち、すでに『社会科学』第43巻第3号において紹介した梅枝香・若菜下香を除く八つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概

略を記すにとどめる。

凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには「〃」を付して丁数を記す。
- 一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「※」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。
- 一、巻末には影印を付す。

矢野環
岩坪健
福田智子

31 真木柱香

【翻刻】

△真木柱香

いまはとて宿かれぬともなれきつる

まきのはしらは我をわするな

試なし。

一 名乗紙にて聞くべし。

一 一二三の香、各五包充、都合十五包打交て、三包充結合五組とし、其内一組除け、残四組^註出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 出香十二包を三炷聞に四次聞て、後に同香別香の續を開分たる」二三通りに、其名目を認出すべし。三種香系圖香なとの例に等し。

○（朱）三炷組名目認様左のごとし。

三炷共に別香と聞ば もの、けと書

三炷共に同香と聞ば 火とりの灰と書

（一）^{三炷皆}同香と聞ば ひけ黒と書

（二）^{三炷皆}同香と聞ば 大姫君と書

（三）^{三炷皆}同香と聞ば 楨柱の君と書

一 記録点は何人にも一点充也。認様末に出す。」二三ウ

真木柱香記 二二三除（朱）

〔表〕 一四才

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一 | 5 | 1 | 4 |
| 二 | 5 | × | × |
| 三 | 3 | × | × |
| | 3 | × | × |
| | 3 | × | × |

* 本香には、「一」「二」「三」の三種類の香を用いる。試香はな^{*}い。三種類の香を五包ずつ、計十五包を用意し、まず、それらを交ぜて、三包ずつ五組に分ける。これらの中から一組を除き、残り四組、十二包を出香する。三炷聞きを四回繰り返し、三炷^{*}ごとに、答えを名乗紙に書く。

* 答えには、聞きの名目を用いる。三炷のうち、すべてが別香の場合は「もの、け」、すべてが同香の場合は「火とりの灰」と記し、以下、同香が一・二炷目では「ひけ黒」、一・三炷目では「大姫君」、二・三炷目では「楨柱の君」と答える。正答は、本香をすべて焚き終わってから披露する。

なお、竹幽本に当該組香の類例として挙げられている「三種香」「系図香」は、三、四種類^{*}の香を試香なしで聞き、提示された聞きの名目によって名乗紙で答えるというものである。いずれも『香道蘭之園』に収載されている。

記録点は、聞き当てた人数に関わりなく、一炷聞き当てるごとに一点ずつ加える。たとえば、正答が「火とりの灰」（すべて同香）の時に、「ひけ黒」「大姫君」「槿柱の君」（三炷のうち二炷が同香）と答えた場合は、同香二炷を聞き当てたと見て、二点加算する。また、正答が「ものゝけ」（すべて別香）の時に、「ひけ黒」以下の二炷同香の名目を答えた場合は、別香を一炷だけ聞き当てたと見て、一点を与える。さらに、正答が「ひけ黒」「大姫君」「槿柱の君」の時、すべて別香の「ものゝけ」と答えると、別香一炷を聞き当てたとして一点、「火とりの灰」には、同香二炷を聞き当てたとして二点を加えることになる。なお、正答がそれぞれ「ひけ黒」「大姫君」「槿柱の君」であった場合に、これら三つのうちの別の名目で答えた時は、同香の対と別香一炷をすべて聞き誤ったことになるため、得点はない。

蘭之園本では、三種類五包ずつ全十五包を用意し、三炷聞きにする点や、聞きの名目は竹幽本と同じだが、十五包すべてを出香とするところに差異が見られる。この方法では、最後の一組三包にどの香が残ったかは、それまで聞き分けた香によって一意に定まるが、竹幽本では、その組を排除したことになる。

（2）『源氏物語』との関わり

前述のとおり、竹幽本の開きの名目（「ものゝけ」「火とりの灰」「ひけ黒」「大姫君」「槿柱の君」）は、すべて蘭之園本にも

使われている。そのうち「ものゝけ」と「火とりの灰」は『源氏小鏡』の寄合にも見られる。「大姫君」については、尾崎左永子氏・薫遊舎校注『香道蘭之園』（増補改訂版、二〇一三年五月、淡交社）に、「この語はこの巻には出てこない。貴人の長女、姫君をいうが、ここでは式部卿宮の娘、髭黒の正妻をさすか。」^①と注されているが、『源氏小鏡』に、「もとのきたのかたは、（中略）しきふきやうのみやの大ひめきみにて」（傍線筆者）^②と述べていることから、やはり髭黒大将の正妻を指すと見てよいだろう。

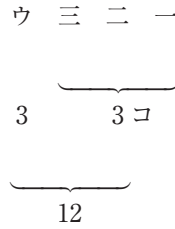
また、「ひけ黒」「槿柱の君」も、『源氏小鏡』に出てくる。前者は、物語の一節「色黒く鬚がちに見えて」（行幸巻、③二九二頁）^③による慣用の呼称であり、後者は、巻名歌「今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな」（③三七三頁）により、後に「真木柱の姫君」（若菜下巻④一五九頁、竹河巻⑤八九頁）と呼ばれたものである。

名目を用いて当巻のあらすじを記すと、以下ようになる（なお、名目には傍線を付す）。ひげくろの正妻である大姫君は、物の怪により病みやつれ、夫婦仲は冷えていた。光源氏が養女にした玉鬘には多くの貴公子が求婚したが、女房の手引きで髭黒大将と結ばれた。ある夜、髭黒が玉鬘のもとに出かけようとして、薫物の香りを焚き染めていたとき、大姫君は火取（香炉）

を手にして火取の灰を夫に浴びせた。それ以来、鬚黒は正妻のもとに寄りつかなくなり、大姫君は娘の真木柱の君を連れて実家に戻ることにした。真木柱の君は、いつも寄りかかっていたお気に入りの柱と離れるのがつらくて、巻名歌(③三七三頁)を詠んだ。

32 梅枝香 (十四丁裏〜十八丁表。

『社会科学』第43巻第3号参照。)



33 藤裏葉香

【翻刻】

△藤裏葉香

春日さす藤のうら葉のうらとけて

君しおもは、われもたのまん

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二の香三包充、藤裏葉香五包客香なり、都合十一包出香とし、皆

焚終て包紙を開くべし除香一包有故に。焚香は九包也。

一 一二の香、外に拵へ試に出す。藤裏葉は客故試なし。」一八ウ

一 出香十一包打交、其内三包除け、残八包二包充組合て四結とし、二炷間に焚出すべし。

一 除たる三包の内より一包取て、致仕大臣チシノワトと名付て初に一炷間に焚出也包除たる二。記録は香本に致仕大臣と朱にて認る。中

りたるを聳と記す。不中は札銘の数を書べし。

一 札は藤裏葉の香に三の札三枚とウ札二枚打べし。」一九オ

一 香組合の名目、左のごとく認べし。

一 一(朱) 幼婦クラヤメ 二二(朱) 管絃

一 二(朱) 藤の花 二二(朱) 春の名残

一 ウ(朱) 夕霧ギリ ウ一(朱) 袖の雫シヅク

一 二ウ(朱) 雲井廐 ウ二(朱) 関の荒垣

一 ウウ(朱) 緑の袖

一 記録点は、聳中り独聞七点、二人六点、三人五点、四人」

一九ウ四点、五人より三点充也。不聞は独外星五つ、二人星四つ三人星三つ、四人星二つ、五人より星一つ充附るべし。

二 炷間は客香独聞三点、二人より二点充、地香独聞二点、二人より一点充也。不聞に星なし。二炷の内、一炷も不中は

香銘を記へし。聞の下に点星を消合て認る也。書様左に記す。」二〇オ

藤裏葉香記 一二除（朱）

〔表〕「二〇ウ」

【考察】

（一）竹幽本組香の方法

| | | |
|-----|---|---------------------|
| 一 | | |
| 二 | 3 | コ |
| 藤裏葉 | 5 | 11 2 1 + 2 × 4 |

本香として、地香「一」「二」を各三包、客香「藤裏葉」を五包、全部で十一包を用意する。試香があるのは「一」「二」の香のみである。「藤裏葉」は客香のため、試香はない。

まず、全十一包から三包を除き、残りの八包を二包ずつ四組にする。それから、除いた三包の中の一包を「致仕大臣」と称し、一炷目にこの香を焚く。残りの二包は用いず、続いて先の四組を二炷聞きにする。

答えには、十炷香札を用いる。「一」「二」の香、各三炷には、そのまま「一」「二」の札、各三枚を用いればよいが、「藤裏葉」の香は、五炷出る可能性があるため、「三」の札三枚と「ウ」の札二枚を打つ*。

記録は次のようである。まず一炷目は、香本（正答を書く場所のこと。ただし、現行の御家流・志野流では、このような記

録のしかたはしない。）に「致仕大臣」と朱書きする。そして、聞き当てた場合は、「智」と記す。聞き外した場合は、札銘（一、二、三、ウ）をそのまま記す。また、二炷聞きには、聞きの名目を記す（翻字参照）が、二炷のうち、すべて聞き外した場合は、香銘（一、二、三、ウ）を記すにとどめる。

記録点は、一炷目の「智」を聞き当てると、独り聞きでは七点、二人聞きでは六点、それ以下は、四人まで一点ずつ減り、五人からは三点である。聞き外した場合は、独りでは星五つ、二人では四つ、それ以下は、四人まで星が一つずつ減り、五人からは星一つとなる。二炷聞きの場合は、客香「藤裏葉」が一炷でも入っていた時は、独り聞き三点、二人からは各二点である。一方、地香の独り聞きは二点、二人からは各一点であるが、聞き外した時も、星は付かない。以上の点と星を相殺した点数を記録に記す。

蘭之園本では、「一」「二」の香（試香あり）と「ウ」の香（試香なし）を各三包、計九包用意する。竹幽本が、客香を「藤裏葉」と称し、五包用意する点で異なっている（「藤裏葉」は、蘭之園本では聞きの名目のひとつ〈後述〉）。また、最初の香を一炷聞きにし、聞き当てた時に「智」と記すのは同じであるが、その一炷を、記録に「致仕大臣」と書くのは、竹幽本だけである。もっとも、蘭之園本の名目の中に、「初香一炷 むこ 致仕大

「臣」とあるので、竹幽本はおそらくこれに発想を得たのであろう。蘭之園本に列挙される八つの名目のうち、「管絃」「藤のほな」「夕ぎり」「雲井の雁」「みどりの袖」「むこ」の六つは、竹幽本も継承しているが、「紅梅大臣」「藤のうらば」の二つは採らず（このうち「藤のうらば」は、竹幽本では客香の名目〔前述〕、代わりに「幼婦」「春の名残」「袖の雫」「関の荒垣」の四つを追加している。また、記録点についても、蘭之園本では、「聶」の得点を二点とし、また、「ウ」の得点を、聞き当てた人数に関わらず二点とするという指示のみであるのに対し、竹幽本は、「聶」の当たり点を極端に高くし、二炷聞きの時にも、客香・地香の区別や、聞き当てた人数による点数に差を設け、さらに、組香全体について星を付けるといった趣向が見られる。

（2）『源氏物語』との関わり

前述のとおり、竹幽本は、蘭之園本にある聞きの名目のうち、「紅梅大臣」と「藤のうらば」を採っていない。後者は客香の名目に改めて用いているが、前者は、他の名目と差し替えられてしまっている。これはおそらく、「紅梅大臣」が当巻ではまだ少将である点に起因しているであろう。本組香では、少将の父の呼称「致仕大臣」も名目として用いている。その一方で、息子の少将を、後の呼称「紅梅大臣」とするのは、当該場面にそぐわないと判断されたのではあるまいか。

一方、蘭之園本になく竹幽本にある四つの名目「幼婦」「春の名残」「袖の雫」「関の荒垣」は、いずれも『源氏小鏡』には見当たらず、すべて物語中の和歌に詠みこまれている点に注意しておきたい。以下、名目を用いてあらすじを記す。

光源氏の息子である夕霧と、致仕大臣の娘である雲井雁は幼なじみであったが、娘を入内させるという父親の意図により、二人の仲は引き裂かれた。当時の夕霧はまだ緑の袖（六位の者が着る衣の色）で、つらい仕打ちに嘆くしかなかった。

それから六年が過ぎ、夕霧は中納言（従三位に相当）にまで昇進した。雲井雁の入内は実現できず、また夕霧と宮家との縁談が噂されるようになると、致仕大臣は譲歩して、夕霧を聶として認めることにした。大臣邸の藤の花（③四三四頁）が咲き誇る頃、管絃の宴を設け、次の和歌を夕霧に送り招待した。

わが宿の藤の色こき黄昏に尋ねやは来ぬ春の名残を

（③四三四頁）

宴が始まると致仕大臣は酔った振りをして、「藤の裏葉の」（巻名歌の第二句。四三八頁）を口ずさみ、結婚を許可する意思を暗に示した。また雲井雁の兄弟も次の和歌を夕霧に詠み、新郎新婦を祝福した。

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

（③四三九頁）

夕霧と再会した雲井雁は、

浅き名を言ひ流しける河口はいかが漏らしし関の荒垣

（③四四一頁）

と詠み、浅はかな噂を流した夕霧にすねてみせた。

その翌朝、後朝の文で新郎は新婦に次の和歌を送り、今まで
は涙の雫にぬれた袖をこっそり絞っていたが、今は結婚したの
で絞らずにいるのを咎めないでほしい、と詠みかけた。

咎むなよ忍びに絞る手もたゆみ今日あらはるる袖の雫を

（③四四二頁）

34 若菜上香

【翻刻】

△若菜上香

こまつはらすゑのよはひにひかれてや

野邊のわかなもとしをつむへき

此組は蹴鞠香の倂にて秘傳多し。口授すべし。

一 三炷開也。二人充組合聞べし。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三客の香、各三包充、已上十二包の内、二包捨香」三

オとし、残り十包を三包充三結一包と都合四度に焚出す也

地香外に拵へ。試に出す。

初三包い序と 中三包い破と 後三包い急と

末一包い香渡と

三炷開三度済で、沓渡の一炷を名残に聞なり沓渡の一炷は秘事有。故に爰に述べたし。 沓
渡独聞、人形三間進む。二人より二間也。

一 客地香の差別なく鞠人形双方持の時は、互に進退」二ウな
し。一方二柱間は、二柱間の方一問進む也。二柱間三柱間ともに

中り双方對様なれは互に進退なし独間の鞠人形向ふの樹を越は勝也。鞠人形の勝負にては盡は終らず。

一 破の香一方三炷共に聞、一方不中は腰の扇を相手へ渡す。又

客中りにも一方中らねば渡す也。

一 鞠一足両方の真中に置也鞠人形の二の勝たる方の樹に掛るべし。二組以上。一 二二才

一 女三の人形進は、一組兩人の内にて一人中りたるは進退な

し。一組の兩人ながら中れば二間すゝむ。又二人ともにあ
たらざる時は、一問退く。人形向ふの翠簾の内に入ると女
三の方勝として、夫限りに終る也人形翠簾に入ると。みすを落すべし。 沓渡聞たりと

も進退なし。

一 記録は中り斗を記す。認様左のごとし。」二三ウ

若菜上香記 一三除（朱）

〔表〕「二三オ

若菜上香立物圖

〔図〕「二三ウ

〔図〕「二四オ

〔図〕「二四ウ

同盤之圖 豎溝三筋 横界十六間

〔図〕「二五オ

《秘記》（竹幽本は、花・月・秘記の三冊と香包銘書から成る。詳しくは「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）参照。）

若菜上香

一 翠簾の長さは見合にして女三宮人形の隠る、程にすべし。
盤に翠簾立の穴も、翠簾の恰合に應し、二目に明るべし。

一 四本の樹并人形配事

〔図〕「三オ

四本樹 三間目の畔に立る

如圖人形

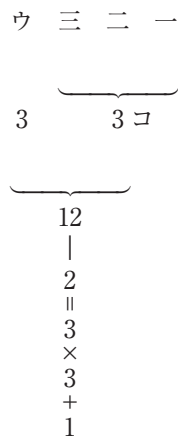
三間目の溝に置付人形の列番
付圖に記す

女三人形 軒方の一間目
の溝に置く

一 扇の指様、蹴鞠香同然。

【考察】

（1）竹幽本組香の方法



本組香は、蹴鞠香をもとにした盤物であり、秘伝が多い。そこで、口授（直接口で言って伝えること）による教授法を採るべきことが強調されており、別冊『秘記』にも記述がある。

*本香には、地香「一」「二」「三」と、客香を三包ずつ、計十二包を用意する。試香は、地香のみ別に用意して本香の前に焚く。

本香十二包のうち二包を除き（捨香、残り十包を三包ずつ三組と一包に分け、三炷開きで三度と一炷開きで一度、焚き出す。

初の三包を「序」、中の三包を「破」、後の三包を「急」、末の一包を「杳渡」と呼ぶ。三炷開を三度行つてから、最後の一炷を聞く。

「杳渡」には秘事があり、ここで述べることはできないという

が、その内容は『秘記』にも記されない。『香道蘭之園』三卷所収「蹴鞠香」においては、「杳渡」について、「杳直しと云説あり。はなはだあやまり也。」⁽⁴⁾「杳渡しは最初の物なれば、はじめにあるべき物なれ共、それにては興うすきによりて十炷目へおくる也。」⁽⁵⁾「杳渡しはうぐひすにさすべからず。」といった言及がある。

連中は二人ずつの組を作り、女三の宮人形一体と鞠装束人形（記録には「公家」と記載される）四体、計五体の人形に付く。女三の宮人形の脇には、唐猫一匹を置き、猫をつないだ綱を人形に持たせる。また、鞠装束人形の腰には、扇を差す。盤上には、これらの人形とともに、松・柳・桜・楓の木、各一本と、翠簾二つを配置するが、詳細は口伝であるという。

その内容は、別冊『秘記』に、次のように述べられている。すなわち、翠簾は、女三の宮の人形が隠れるくらいの長さにし、盤上に立てる穴も、御簾の様子に合わせ、二間目に開ける。また、四本の木は三間目の縁に立て、鞠装束人形は三間目の溝に置き、女三の宮の人形は、軒方の一間目の溝に置くことが図示される。扇の差し方は、蹴鞠香に同じというが、『香道蘭之園』三卷所収「蹴鞠香」に記される、「人形扇をさす事。右にさすを笛さしといふ。うしろにさすをやなくひさしといふ。」⁽⁶⁾という内容を指すと推察される。

答えには、十炷香札を打つ^{*}。女三の宮人形と鞠装束人形とは、人形の進め方が異なる。まず、女三の宮の人形は、一組中、ふたりとも聞き当てた場合は二間進み、ひとりの場合は進退なく、ふたりとも聞き外した場合は一間退く。

一方、鞠装束人形は、三炷聞きの場合、客香・地香の区別や、独り聞きの場合の優遇はなく、一組の聞き当てた数の合計により人形の進退を定める。すなわち、聞き当てた数が、他の鞠装束人形の組と同じである場合は、お互いに進退はないが、聞き当てた数に多寡のある場合は、多く聞き当てた方が、少ない方の数を引いた分だけ、人形を進める。たとえば、一方が一炷、もう一方が二炷聞き当てた場合は、二炷聞き当てた方が一間進めるが、たとえ二炷、三炷を聞き当てたとしても、双方同じ数であれば、人形を進めることはできない。もし、一方が「破」の香を三炷ともに聞き当て、もう一方がすべてを聞き外した場合、聞き外した方の鞠装束人形の腰の扇を相手に渡す。また、一方が客香を聞き当て、もう一方が聞き外した場合も同様である。また、最後の一炷「杳渡」は、独り聞きで人形を三間進めることができる。二人以上では二間である。

勝負は、人形が向かい側の木、あるいは翠簾に達することで決する。すなわち、鞠装束人形は向かいの木を越えると勝となり、盤の中央に置いておいた鞠一つを、最初に勝った方の木に

掛ける。二組以上が同時に勝った場合はどこにも掛けない。なお、この鞠装束人形の勝負が決しても、盤の勝負は継続する。一方、女三の宮の人形は、向かい側の翠簾の内に入ると御簾を下ろし、女三の宮の方が勝となる。それで勝負は終わり、たとえ最後の「杳渡」を聞き当てたとしても、人形の進退はない。

以上、竹幽本は、蘭之園本と同じ内容の踏襲と言ってよく、その根底には蹴鞠香が存する。ただし、その述べ方は、蘭之園本が「但、記録の付やう、諸事蹴鞠香のごとし」というように、秘事があるにせよ、すべて蹴鞠香に譲るのに対し、竹幽本は、秘事を別冊『秘記』に収めるという態度をとっている点に留意される。なお、竹幽本『源氏千種香』は、同時に書写および制作されたと思しき『香道籬之菊』全六冊とともに伝来しているが、そこに蹴鞠香は掲載されていない。

(2) 『源氏物語』との関わり

卷名歌は四十歳になった光源氏を祝して、養女の玉鬘が幼い息子たちを連れて六条院(源氏の邸宅)で賀宴を催した折、源氏が感謝して詠んだ和歌(④五七頁)である。歌中の「小松原」は幼い孫たち、玉鬘が源氏に献上した「若菜」(春の七草)は源氏自身を指す。

盤物はその翌年、六条院で開かれた蹴鞠の場面(④一三六頁)を再現している。盤に立てる「四本樹」(松・柳・桜・楓)は、

蹴鞠の庭の四隅に一本ずつ植えるものである。物語では、光源氏と結婚した女三の宮の部屋に面した庭で、蹴鞠が行なわれた。女三の宮には以前、柏木という貴公子が求婚したが、彼はまだ若輩であったため断られた。しかし思いを断ち切れないまま二年が過ぎ、蹴鞠に参加した柏木は偶然、女三の宮を垣間見てしまう。その発端は猫である。女三の宮がかわいがっていた小さな「唐猫」(舶来種の猫)が大きな猫に追いかけられ、「翠簾」(立派に飾られた簾)の端から走り出たが、首に付けられた綱が簾に引っかかり、簾が開き、室内にいた女三の宮の姿を柏木は見てしまう。この事件はやがて六条院の秩序を乱すきっかけとなり、光源氏の人生に影を落とすことになる。

35 若菜下香 (二十五丁裏〜二十八丁裏)

『社会科学』第43巻第3号参照。

| | | | |
|---|-------|----|---|
| ウ | 三 | 二 | 一 |
| | | 3コ | |
| 3 | | | |
| | 12+3コ | | |

36 柏木香

【翻刻】

△柏木香

いまはとくもえんけふりもむすば、れ

たえぬおもひのなをやのこらん

一 一二三の香、各三包充、煙くらべの香一包客香、都合十包出

香とし、一炷充焚出すべし。

一 地香外に拵へ試に出す。客香は試なし。

一 出香十包打交、其内一包取て、点定と名付て」二九オ初に焚

出し、札を受けて香元に預り置き、二炷目より常の通焚出し、

一 炷毎に札を受けて九包皆焚終て、二炷目より記録に写し、香

の包紙を開き、点星を定て後に、初の一包を開くべし。十

炷目の香は焚出すに及ず。札の残りにて知るべし。点定の

一 炷を間違たる人は、十炷目の札銘は記に及ず、明置べし。」

二九ウ

一 同香三包の内、一包は一炷中りに点かくる。二包は其同香

二炷共に中れは点かける。一炷にては点なし。

一 札打様左のごとし。

但し間違たるは札銘を不認、一二三ウと数を記すべし。

一の香三包内」三〇オ

初に出る一に かすらぬ色の札

中に出る一に 誰か世の札
末に出る一に

二の香三包内

中に出る二に やどの桜の札

初に出る二に 蒔し種の札」三〇ウ

末に出る二に

三の香三包内

末に出る三に 霞の衣の札

初に出る三に 岩根の松の札

中に出る三に

煙競の香一包 葉守神の札

一 記録点は、客独聞四点、二人より三点、間違星一つ附るべ

し。一炷聞独中り三点、二人より二点、間違」三〇オ星なし。

同香の二炷聞は独中り二点、二人より一点充、一炷斗聞た

るは点なし。二炷ともに間違たるは星一つ充附る也。点定

の一炷は聞たるを朱にて書、何人にも三点充かくるべし。

点定を不聞人は、たとへ残九炷の香皆中たりとも点なしに、

札銘斗りを認置べし。

一 札一人前拾枚、十人分百枚也。」三一ウ

札表

十炷香の札紋に同じ。

札裏

かわらぬ色 宿の桜 霞の衣 葉守の神 各一枚充
誰が世 蒔し種 岩根の松 各二枚充

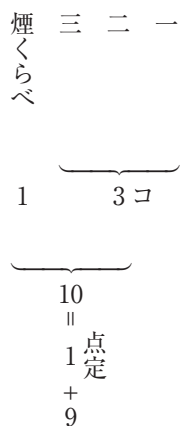
一 記録認様左に記す。三三オ

柏木香之記

〔表〕三三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香として、地香「一」「二」「三」の香を三包ずつと、客香「煙くらべ」の香一包の計十包を、一炷ずつ出香する。試香は地香のみ行う。

全十包のうち、任意の一包を「点定」と名付けて、最初に焚き出す。答えには、専用の札（後述）を打つが、この最初の札は、香元が預かつておく。二炷目からは、通常通り、一炷ごとに札を打ち、答えを記録する。残り九包すべてを焚き終えてから、二炷目から十炷目の香の包紙を開き、正答を披露し、点や

星を定める。その後、香元に預けた一炷目の札の答えを記載し、包紙を開いて正答を披露する。なお、十炷目は、焚き出すまでもなく、答えは残りの札ということになる。最初の「一炷点定」を聞き違えた人の記録には、十炷目の札銘を記さず、明けておく。仮に十炷目を聞き当ても、得点にはならない。

答えには、十枚十人分、計百枚の札を用いる。札の表は、十炷香札の紋と同じだが、裏は、「かわらぬ色」「宿の桜」「霞の衣」「葉守の神」を一枚ずつ、「誰が世」「蒔し種」「岩根の松」を二枚ずつの計十枚である。最初に出た「一」の香に「かわらぬ色」、二番目の「二」の香に「宿の桜」、最後の「三」の香に「霞の衣」、三番目の「三」の香に「葉守の神」の札を打ち、これら以外の「一」の香に「誰が世」、二の香に「蒔し種」、三の香に「岩根の松」を打つ。

同香三包のうち、「かわらぬ色」（最初の「一」の香）、「宿の桜」（最初の「二」の香）、「霞の衣」（最初の「三」の香）を開き当てた時には、一炷ごとに加算するが、その他の二包については、二炷ともに聞き当てれば加算するが、一炷だけでは点にならない。

記録点について、客香「煙くらべ」（札は「葉守の神」）の独り聞きは四点、二人以上は三点を加え、聞き違えには星一つを付す。一炷聞き（札は「かわらぬ色」「宿の桜」「霞の衣」）の場

合は、独り聞き三点、二人以上は二点を与える。聞き違えにも星は付けない。同香の二炷聞き（札は「誰が世」「時し種」「岩根の松」）は、独り聞き二点、二人以上は一点ずつ与え、一炷のみ聞き当てても点はない。二炷ともに聞き違えた場合は、星を一つ付す。同香三炷を聞き当てるだけではなく、出香の順をも把握しなければならぬところに難しさがある。一炷目の「点定」は、聞き当てた時には朱で記し、聞き当てた人数に関わらず三点ずつ与える。聞き外した場合は、たとえ残りの九炷すべてを聞き当てたとしても、点はなく、札銘だけを記すにとどめる。「点定」を設定する所以であり、非常に重要な一炷である。なお、香を聞き違えた場合、記録には、札銘ではなく、「一」「二」「三」「ウ」と記す。

蘭之園本では、「誰が世」「時し種」「岩根の松」（試香あり）を一包ずつと、「煙くらべ」（試香なし）を六包の計九包を用い、試香のある三種類の香のうちの一包と試香のない「煙くらべ」二包の計三包をまとめて三組作り、三炷聞きにするという方法をとる。答えは、「初の中 岩根の松」というように、三炷中、試香のある香が何番目に出たかを名乗紙に記し、「煙くらべ」は聞き捨てにする。一般に、試香のない香を客香とすることが多いが、蘭之園本の「煙くらべ」が客香だとすれば、この点は竹幽本も同じである。また、地香三種の名は、竹幽本でも二炷聞

きの札銘に用いられるなど、竹幽本が蘭之園本から継承したと見られる点もある。だが、その一方で、竹幽本の組香は、前述のとおり、単に同香を聞き当てるのみならず、出香順をも問うという構成になっており、答え方も、名乗紙ではなく、蘭之園本に見られない「かわらぬ色」「宿の桜」「霞の衣」といった銘を追加した独自の香札を用い、より複雑化していることがわかる。

（2）『源氏物語』との関わり

竹幽本に加えられた名目「かわらぬ色」「宿の桜」「霞の衣」は、すべて物語中の和歌に詠みこまれている。以下、名目を用いてあらすじを記す。

蹴鞠の場（若菜上の巻）で女三の宮を垣間見た柏木は思いを抑えきれず、ついに逢ってしまい、女三の宮は懷妊する。そのことを光源氏に知られ、柏木は良心の呵責に苛まれ衰弱する。重病の身をおして柏木が女三の宮に送った和歌が巻名歌（④二九一頁）であり、その返歌が、

立ちそひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱るる煙くらべ
に
（④二九六頁）

である。女三の宮は男子（薫の君）を出産した後、光源氏の冷

淡さに絶望して出家する。それを聞いた柏木は重態に陥り、親友の夕霧にわが妻（落葉の宮）の世話を頼んで亡くなる。薫の五十日の祝いが盛大に執り行われるが、事情を知っている光源氏は複雑な気持ちで、女三の宮に皮肉な歌を詠みかける。

誰が世にか種は蒔きしと人間はばいかが岩根の松は答へむ

（④三三五頁）

夕霧は柏木の遺言を守って落葉の宮を見舞い、次の和歌を詠む。

時しあれば変はらぬ色に匂ひけり片枝枯れにし宿の桜も

（④三三二頁）

「片枝枯れにし宿の桜」は寡婦を暗示し、桜が「変はらぬ色に匂」うように、落葉の宮にも良いことがあると慰めた。

その後、夕霧が柏木の実父を見舞いに行くと、父は子に先立たれた悲しみを和歌に託した。

木の下の子にぬれて逆さまに霞の衣着たる春かな

（④三三五頁）

「逆さま」は親に先立つ逆縁、「霞の衣」は喪服を意味する。

夏になり、夕霧が落葉の宮を訪ねて和歌を詠むと、次の歌が返ってきた。

柏木に葉守の神はまさずとも人馴らすべき宿の梢か

（④三三八頁）

「葉守の神」（木の葉を守る神）は柏木の木に宿るとされ、その神が「まさず」（いらつしやらない）とは夫、柏木の死を指す。夫がいらないからといって「人馴らす」（慣れ親しむ）ことはありません、と夕霧の思慕の念をたしなめた。この優れた詠み方に、夕霧はますます心引かれていく。

37 横笛香

【翻刻】

△横笛香

よこぶえのしらべはことにかわらぬを

むなしくなりしねこそつきせね

一 試なし。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 夕霧方五人、落葉方五人と分つ。

一 琴^{キン}の香、瑟^{シツ}の香、笙^{シヤウ}の香、各四包充、客香五包」 三三才 三包同香
二包同香

也。都合十七包の内、十四包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 出香五炷充、双方に分て焚出す。香爐は二つ充、双方に分て、一同に廻すべし。方^{タテマツ}、礼筒、落葉。折居を廻すなり。

夕霧方にて聞たる五炷は、落葉方にては不聞。又落葉方にて聞たる五炷は、夕霧方にて不聞。双方の間香五炷充別也。」三三三

一 地香各二包充六包打交、其内一包除け、五包を一結にして夕霧方、初の出香とす。又残六包の内、一包取除け、五包を一結にして、落葉方、初の出香とす。客香五包打交て、内一包除け、残四包を二包充分けて、双方後の出香とす。此二包は二柱間也

地香十包焚終て、後の出香二包充を、二柱間に双方に焚出す。仕方前。「三四才

一 初五炷は無試十炷香の如く聞也。琴香に^{一の}、瑟香に^{二の}、笙香に^{三の}、横笛に^{ウの}、琵琶に^{ウ枝札}うつべし。

一 後の出香、双方二包充、二炷聞終て、札一枚うつ也。二炷同香と聞は横笛の札、二炷別香と聞は琵琶の札打也。初五炷の札は一二三の順にかゝわらず、極なく二枚充打べし。夫故に銘々にて札と香と同名異名にてもくるしからず。同札

二枚の内、一枚残たるを、一包充除たる香とする」三四ウベし。外二種は上下二炷結たるを中りとする也。

一 記録点は、地香独聞二点、二人より一点充、二炷聞の独聞は五点、二人四点、三人より三点充也。二炷聞は一炷点。中りたは点なし。皆中は褒美として聞の下に朱にて左のごとく認るべし。

地香横笛共に聞たるは
盤渉調

地香琵琶共に聞たるは 想夫恋

記録認様次に顕す。」三五才

橫笛香之記

〔表〕
三五ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

| | | | | |
|---|-----|---|----|-----|
| ウ | 客 | 笙 | 瑟 | 琴 |
| 2 | 3 | | | |
| 3 | | | 4 | |
| 1 | | | | |
| 2 | 夕霧方 | | (2 | 夕霧方 |
| 1 | | | 3 | |
| + | 落葉方 | | | |
| 2 | | | 1) | |
| 1 | | | + | |
| | | | (2 | 落葉方 |
| | | | 3 | |
| | | | | |
| | | | 1) | |
| | | | 初段 | |
| | 後段 | | | |

に分けておく。

本組香は、初段と後段に分かれる。初段は、地香三種類を各二包ずつ、計六包とし、その中から一包を除いて、五包一結びを作る。残りの地香も、同様の手順で五包一結びとし、それぞれ夕霧方と落葉方の初段として出香する。つまり、夕霧方と落葉方とは、同じ香を聞くのではなく、別に仕立てた香を聞く。そのため、香炉を二つ同時に廻す。この場合、伝書には明記されないが、二つの香炉を初客と末客から逆方向に廻す場合と、初客と中途の客から同方向に廻す場合がある。後段も同様に、客香五包のうち一包を除き、残り四包を二包ずつ二つに分け、それぞれを夕霧方と落葉方とで聞く。前段は一炷聞き、後段は二炷聞きにする。

答えには十炷香札を用いる。ただし、夕霧方は札筒、落葉方は折居を廻して札を打つ。^{*}初段の五炷は、無試十炷香のように、一炷目から順に、「一」「二」「三」の札を打っていく。それぞれ二枚ずつ用意しておき、最後に残った一枚が除いた香ということになる。二種類の地香二炷をペアで聞き当てる点となる。なお、竹幽本には、「琴に一」など、香ごとに札の指定があるが、試香がないため、札の打ち方としては無理がある。また、後段は二炷聞きなので、二炷聞き終わってから、札を打つ。二炷同香の場合は「横笛」で「ウ」の札一枚、二炷別香の場合は「琵琶」

「琵琶」で「ウ」の札二枚を打つ。一炷だけ聞き当ても得点は無い。

記録点は、初段では独り聞き二点、二人からは一点、後段では、独り聞き五点、二人からは四点、三人からは三点である。夕霧方と落葉方、それぞれの組で得点を合計する。全部聞き当てた場合は、香之記に褒美として、「盤渉調」(後段が同香の「横笛」の場合)、^{*}「想夫恋」(後段が別香の「琵琶」の場合)と記す。

蘭之園本では、「楽」香四包(試香なし)を、「笛」「琴」の香(試香あり)各二包と、一包ずつ結び合わせて四組にし、二炷聞きを四回行うという組香になっており、竹幽本に比して、簡便な構造である。^{*}開きの名目「夕霧」「かほる」「落葉」「母君」のうち、「夕霧」と「落葉」は、竹幽本では二つに分けた連中の呼称として用いられているが、他は見当たらない。一方、蘭之園本にはなく、竹幽本に見える「琴」「瑟」「笙」「横笛」「琵琶」「盤渉調」「想夫恋」が、すべて雅楽に関連する語である点には留意されよう。

(2) 『源氏物語』との関わり

本組香の香の名目は、前掲のとおり、蘭之園が、「楽」(音楽)、「笛」(管楽器の総称)、「琴」(絃楽器の総称)であるのに対し、竹幽本は、「琴」「瑟」「琵琶」(以上、絃楽器)と「笙」「横笛」(以上管楽器)であり、すべて楽器の名称である。また、竹幽本

の褒美の言葉のうち、「盤渉調」は雅楽で用いられる調子の一つ、「想夫恋」は雅楽の曲名で、夫を想う恋の曲である。

『源氏物語』にも登場する楽器の名称は、「笛」「琴」と「横笛」「琵琶」だけで、「瑟」と「笙」は、どの巻にも見られず、また『源氏小鏡』にも見出せない。『源氏物語』には他の楽器も描かれているが、竹幽本は物語の内容とは関係なく、雅楽器の名称を名目に当てはめたと考えられる。

前巻で親友の柏木を亡くした夕霧（光源氏の子息）が、柏木の正妻である落葉の宮とその母のわび住まいを訪れると、邸内にお琴（④三五二頁）の音色が聞こえていた。夕霧は琵琶（④三五五頁）を取り寄せ、想夫恋（④三五五頁）を演奏した。柏木の遺愛の品である笛（④三五六頁）が夕霧に贈られ、試みに吹き鳴らし、盤渉調の半ばあたりで吹きやめて詠んだ御札の和歌が、巻名歌「横笛の調べはことに」（④三五七頁）である。

38 鈴虫香

【翻刻】

△鈴虫香

こゝろもて草のやとりをいとへども

なを鈴虫のこゑぞふりせぬ

一 試なし。

一 十炷香の札を用ゆべし。

一 一の香、二の香、各四包、客の香二包^一包充、都合十包の内、七包出香とす。」^{三六才}

一 一の香二包、二の香二包、客香一包、以上五包打交て、大包をして、上の句と名付る。又、残五包を打交て、其内より三包取除け、二包を小包にして、下の句と名付置くべし

^二一二の札不足する故に「一に花三の札。二に月三の札を借りて打べし」

一 焚出す式は、上の句五包を一炷充焚出し、札を受けて記録し、其後に下の句二包を一炷充焚出し、札を受けて記録して、扱て下の句の香、包紙を開て後に」^{三六才}上の句の香、包紙を開くべし。

一 無試十炷香の通り聞くべし。下の句二包の内に、客香の有無を聞分るを專一とする也。上の句五包の内に客香一包或る故に、五炷の内一枚、札を客と定むるべし。

一 記録認様

「（朱）香本には、此巻の哥を記して、上の句五文字と^{正字にて書べし}観名にて下の二文字^{書べし}の傍に朱にて出香の順銘を書べし。」^{三七才}

「（朱）札銘の下に、上の五文字を假名にて記し置き、其下に聞香の札銘を書べし。

「（朱）上の句札銘の下に、下の句の鈴虫の二字を正字にて認め置。其下に聞香の札銘を書べし。

五炷皆聞中るは五文字に二点、札銘には一点充かくるべし。

「(朱)客二炷ともに聞たらは、鈴虫の字に二点、札銘には一点充かくる也。」三七ウ

客一炷聞は鈴虫の字に一点かけるべし。

地香斗聞は札銘斗に一点かくるべし。

聞中たる褒美に朱にて左のことく認るべし。

皆中 名月と書 客二炷聞 月影と書

客一炷聞 大かたの秋と書 地香斗聞 ふりすてがた

き

皆外 雨夜

一 記録書様左に記す。」三八オ

鈴虫香之記 二三除(朱)

こゝろもて草ニニウのやとり一をいとへども

なを鈴虫ウのこゑ一ぞふりせぬ

〔表〕 三八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

上の句 下の句 札

| | | | |
|---|--|---|---|
| 一 | 二 | 客 | ウ |
| $\begin{matrix} 4 \\ \parallel \\ 2 \end{matrix}$ | $\begin{matrix} 2 \\ \times \\ 2 \end{matrix}$ | $\begin{matrix} 1 \\ \parallel \\ 1 \end{matrix}$ | $\begin{matrix} 1 \\ \parallel \\ 1 \end{matrix}$ |
| $\times 2$ | $\times 2$ | $+$ | $+$ |
| $= 5$ | $= 5$ | | |
| | $- 3$ | | |
| | $= 2$ | | |
| 一、花三 | 二、月三 | | |

本香として、地香*を「一」「二」の香、各四包と、客香*を別香で二包用意し、計十包の中から七包を出香する。*試香はない。

まず、「一」「二」の香を各二包と、客香一包の計五包を交ぜ、大包包にして、「上の句」と名付ける。次に、残り五包を交ぜ、そのうち三包を除き、二包を小包みにして、「下の句」と名付ける。そして、「上の句」「下の句」の順に香を焚き出す。

答えには、十炷香札を用いる。*「上の句」「下の句」とともに一炷聞きとし、無試十炷香の通り、一炷聞くたびに「一」から順に札を打つ。*「一」「二」の香は、それぞれ最大四炷出香される可能性があり、その場合、香札が各一枚不足することになるため、それぞれ「花三」「月三」の札を代用する。

香を聞き終わった後、包紙を開いて答えを披露する順序は、

「下の句」を先とする。これは、「下の句」二包のうちに、客香があるかどうかを聞き分けることが重要であるからである。「下の句」の客香は、これまで一度も焚かれていない香である。

ちなみに、「上の句」五包には、必ず客香一包が入っている。地香は各二包なので、一炷のみ出た香が客香ということになる。客香は、「上の句」「下の句」で別香であるが、「上の句」の客香が聞き分けられれば、地香も判別できる。この地香は、「下の句」でも、少なくとも一炷は焚かれることになり、「下の句」に客香が出たかどうかを聞き分けるための参考になる。

*香之記には、まずはじめに、巻名歌「こゝろもて草のやとりをいとへども なを鈴虫のこゑぞふりせぬ」を記す。上の五文字「こゝろもて」は仮名で、下の二文字「鈴虫」は正字（漢字）で書く。そして、出香の順に、「上の句」五炷と「下の句」二炷の香銘を、それぞれ上の五文字と下の二文字の右に朱で傍書する。

香之記の最上段には、通常どおり連中の札銘を記すが、これ以下は、順に「こゝろもて」（上の五文字）、「上の句」五炷の札銘（答え）、「鈴虫」（下の二文字）、「下の句」二炷の札銘（答え）を記載する。

記録点は、「上の句」の五炷すべて聞き当てた場合、「こゝろもて」に二点、「上の句」札銘に各一点の計七点を加える。また、

客香を二炷とも聞き当てた場合は、「鈴虫」に二点、「下の句」札銘に各一点の計四点となる。なお、客香を一炷のみ聞き当てた場合は、札銘の一点と「鈴虫」の一点の計二点である。地香だけ聞き当てた場合は、札銘の一点のみで、「こゝろもて」「鈴虫」に掛ける得点はない。客香を聞き当てた時の点数が高いという採点方法である。

褒美の言葉は、聞き当てた香の種類と数により、以下のように定められる。すなわち、すべて聞き当てた「名月」、客香二炷を聞き当てた「月影」の他、客香一炷のみの「大かたの秋」、地香のみの「ふりすてがたき」、そして、すべてを聞き外した「雨夜」である。

蘭之園本では、地香「名月」「庭草」（試香なし）各三包と、客香「虫」（試香あり）三包の計九包を用意する。そして、地香計六包を二包ずつ三組とし、それぞれ客香を一包ずつ交ぜて、三包を一結びにして焚き、客香だけを聞いて、地香は聞き捨てとする。また、聞き^{*}の名目は、客香「虫」の出た順序により、地香が同香の場合は、「大かたの秋」（三炷のうち一炷目に「虫」が出た「初の虫」の時）、「ふりすてがたき」（同様に二炷目に「虫」が出た「中の虫」の時）、また別香の場合は「心もて」（初の虫）、「草のやどり」（中の虫）、そしていずれの場合も、三炷のうち最後に「虫」が出た「末の虫」の時は「すゝむし」であ

る。竹幽本と比べ、総じて簡便な構造の組香である。竹幽本が、蘭之園本の香銘や聞きの名目を踏まえながらも、巻名歌を構成に採り込んでより複雑な組香にしようとした方向性が看取される。

(2) 『源氏物語』との関わり

蘭之園本は、香の名目が「名月」「庭草」「虫」で、そのうち『源氏物語』にも見られるのは「虫」しかなく、「名月」と「庭草」は『源氏小鏡』にも見当たらない。一方、聞きの名目は次の贈答歌(④三八二頁)から三つずつ選ばれている。

おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき 鈴虫
の声 (女三の宮)

心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

(光源氏)

蘭之園本が『源氏物語』はもとより、『源氏小鏡』にもない「名月」と「庭草」を引いたのは、中秋の名月の夜、庭の草に鳴く鈴虫を聞いて、右の贈答歌が詠まれたという状況設定に拠るのであろう。

前掲の光源氏の和歌は巻名歌で、竹幽本は巻頭と記録に挙げている。竹幽本の褒美の言葉は五つあり、その中の「大かたの

秋」と「ふりすてかたき」は女三の宮の和歌に拠る。ほかの三つのうち蘭之園本と共通するのは「名月」だけで、「月影」は当巻にあるものの、「雨夜」はない。「皆外」(すべて外れ)の場合は月が見えない「雨夜」としたのであろう。

光源氏は正妻であった女三の宮が出家したのちも世話を続け、宮の住まいの庭に鈴虫を放たせた。光源氏が女三の宮を訪れたときに詠み交わしたのが、前出の和歌である。

39 夕霧香

【翻刻】

△夕霧香

山里のあはれをそふる夕ぎりに

たち出ん空もなき心ちして

一 十炷香の札を用ゆ。

一 夕霧大将方五人、落葉宮方五人と分つ夕霧方上座也。

一 三條の香三包、一條の香三包、小野の香三包、雲井廬の香

一包客香、都合十包出香とし、皆焚終て包紙を「三九才開くべ

し。

一 地香三種ともに外に拵へ置。出香十炷焚終て後に試に焚出

す也。

一 双方勝負の定様は、両方の聞数の多少にかゝわらず、夕霧

と落葉との持の香を満座十人の聞数の多少を以て勝負を決する。持の香といふは左のごとし。」三九ウ

（三條の香
初に出る小野香

夕霧の持香也

（一條の香
終に出る小野香

落葉の持香也

（中に出る小野香
雲井廐の香

双方の持香也

一
聞様は、出香拾包を無試十炷香の通り聞て、一二三ウと順を立て札を打。十包皆終て後に、試の三炷を焚出すとはを聞て、一の札打たるは何の香、二の札打たるは何香と夫々に試に合て、名乗紙に書出す。」四〇オ
認様たとへは

| | |
|------|-----|
| 三條香 | 二の札 |
| 一條香 | ウの札 |
| 小野香 | 一の札 |
| 雲井廐香 | 三の札 |
| 名乗 | |

一
記録は、札と名乗紙とを合て、札は二の札にても名乗紙に三条香と聞くならば三條と記すべし。記録に「四〇ウ写たる札銘を、名乗紙の通りに不殘認替て後に、十炷の包紙を一同に開て点を定むる也。点は客独聞五点、二人四点、三人

より三点充、地香独聞三点、二人二点、三人より一点充かくるべし。点に正傍正は朱点、傍は黒点を分つ也。正二点にて正一点に對す。傍三。点差は正一点にて成て二点は捨る也。初め出香に打たる札にて上中或は中下結ひても試に合ざるは捨る也。一炷にて上下結ばすとも試に合は傍の点たるべし。」四一
オ或は上中下の内にて一炷違ひ二炷試に合て何方にて成とも結たるは正の点也。三炷結ば、勿論なり。正傍の定様色々あり。此組はかくのごとし。

夕霧大将

山里のあはれをそふる夕きりに

たち出ん空もなき心地して」四一ウ

落葉宮

山がつのまかきをこめてたつ霧も

心そらなる人はとゞめす

雲井廐

なる、身をうらみんよりは松嶋の

あまの衣にたちやかへまし

一
記録書様左に記す。」四二オ

夕霧香之記

夕霧方 正卅三点 傍二点

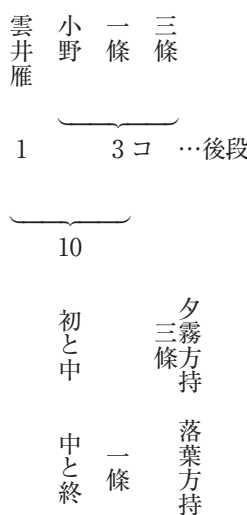
落葉方 正卅二点 傍三点

〔表〕 四二ウ

〔表〕 四三オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香として、地香「三條」「一條」「小野」の香、各三包と、客香「雲井雁」一包を用意し、計十包を出香する。^{*}これとは別に、地香のみ試香を行うが、それは本香をすべて焚き終わった後である。この本香と試香の順序は、通常の組香とは逆であり、注意を要する。

連中は五人ずつ、夕霧大將方と落葉宮方とに分けておく。もちろん、夕霧方が上座である。そして、それぞれ「持香」を定める。ここでは、夕霧方は「三條」および「小野」の初香、落葉方は「一條」および「小野」の終香、双方共通した持香は「雲井雁」および「小野」の中香である。これらの持香を、夕霧方と落葉宮方のどちらの連中が聞き当てたかに関わらず、十人全

体のうち何人が聞き当てたかで得点を競う。つまり、十人が聞き当てた点数を、夕霧方「三條」・「小野」の初香および中香・「雲井雁」と、落葉宮方「一條」・「小野」の中香および終香・「雲井雁」とで集計し、得点を競う。従って、自分の方の持香を聞き当てればもちろん得点になるが、相手方の持香を聞き当ててしまうと、相手方の得点になるという仕組みになっている点に注意しておきたい。

答えには、まず、十炷香札を用いる。^{*}出香される十包を、無試十炷香の通りに、初炷から順に「一」「二」「三」「ウ」と札を打つ。^{*}本香を焚き終わった後、試香三炷、すなわち、地香「三條」「一條」「小野」の香が焚かれる。これらの香を聞いて、先ほどの本香で「一」から順に札を打った香はどの香にあたるのか、名乗紙に記す。^{*}

記録には、まず一炷ごとに打った札銘を記しておく。その後、名乗紙に書かれた香銘と札銘との対応に合わせて、その札がどの香にあたるのか、すべて書き換えていく。これで、札銘の組み合わせによる相対的な記録から、試香銘によって絶対的に定まった答えとなる。その後、包紙を十炷すべて開いて正答を披露する。

点数は、客香の場合、独り聞き五点、二人では四点、三人からは三点ずつ加えられる。^{*}一方、地香は、本香で札を打った際

の香の組み合わせが正しく、かつ、試香と一致することで得点となる。すなわち、一種類の地香三炷のうち、二炷以上の組み合わせを聞き当て、かつ試香と一致した場合、独り聞き三点、二人では二点、三人からは一点ずつ配点される。以上の客香・地香の点数を「正」の点というのに対し、試香と一致する地香を一炷聞き当てた時は、「傍」一点となる。「傍」二点で「正」一点にあたり、「傍」三点は、そのうち一点を捨てて「正」一点に換算される。なお、この「正」「傍」の点の扱いは、組香により様々であり一定しないという。記録には、夕霧方が勝てば夕霧の、落葉方が勝てば落葉宮の歌を記す。引き分けの場合は、雲井雁の歌を書く。

蘭之園本は、地香「一」「二」「三」「四」の香（試香あり）各二包と、客香（試香なし）二包、計十包の一炷聞きである。特徴的なのは聞き^{*}の名目で、同香でも出香の順が前か後かで異なる。従って、「小野」「山ざと」「三条のうへ」「雲井の雁」「一条の宮」「落葉の宮」「つるばみのもと」「少将の君」「夕ざり」「くるす」の十の名目が必要となる。竹幽本の組香は、蘭之園本とは構造が全く異なり、かなり複雑なものとなっているが、蘭之園本に見られる「つるばみのもと」「少将の君」「くるす」といった名目はなく、より整理された感がある。

（2）『源氏物語』との関わり

本組香では、「夕霧大將方」と「落葉宮方」とに分かれ、四つの香（「三条」「一条」「小野」「雲井雁」）を聞くが、そのうち「三条」と「一条」は平安京の三条通・一条通、「小野」は都の東北にある地名で、ほかは登場人物の呼称である。なお、「夕霧」「落葉」「雲井雁」は、いずれも和歌に詠まれた言葉であり、「夕霧」は当巻の巻名歌に基づく。

夕霧大將（④四〇三頁）は、幼なじみで正妻の雲井雁（③四八頁）と、三条（④四六五頁）の屋敷で一緒に暮らしていたにもかかわらず、親友の未亡人である落葉宮（④二三三頁）に心引かれるようになった。落葉宮は母の療養のため、一条（④三九五頁）の邸宅から小野（④三九六頁）にある山荘へ移り住む。夕霧が小野に訪れたとき、落葉宮と詠み交わした贈答歌（④四〇三頁）が、記録に記す和歌である。

残り一首の歌は、落葉宮の母が小野で亡くなり、一条邸に戻った落葉宮に夕霧が懸想したことを聞いた雲井雁が、嫉妬して夫の夕霧に詠んだ和歌（④四七五頁）である。いっそのこと出家して「あまの衣」（尼衣）を着ようかと詠んでいる。

40 御法香

【翻刻】

△御法香

たえぬべき御法なからそたのまる、

よ、にとむすふ中のちぎりを

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 法華八軸の香八包三種の香、
に包分る、形見の梅の香一包ウ香、
也、形見の桜の

香一包客香、
也、都合十包打交、其内二包取除四三ツけ、
也、残八包

出香とす除たる二包は、
別に用事有、香の包分様并札をうつに習ひ有。

一 法會ホウエの傳と云て、香の聞様、香爐の取渡し、灰の押方、筋目ハシメ

の付授(ママ)、秘傳有り。よつて爰にもらしぬ。

一 記録は、連中の多少によつて認様色々替る也。

一 玉鬘香の衣配の傳と、御法香の法會の傳は、至て秘事也。面

授口訣ならでは傳がたし。」四四オ

《秘記》

御法香

一 法會傳と云て、香爐足の向やう、灰の押方、その外色々少

充の習有り。口授に非らては解がたし。

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

法華八軸 三種包分

形見の梅

形見の桜

8

1

1

10 | 2 || 8

* 本香として、地香「法華八軸」の香を八包、客香「形見の梅」

「形見の桜」の香を各一包、計十包を用意する。その十包から二包を除き、残りの八包を出香する。客香 答えには十炷香札を用いる。

なお、地香は三種類の香を包み分けるとある。たいへん珍しい指示である。また、除いた二包は別に用いると記されるが、その方法は明記されない。また、地香の包み分けの方法や、札を

打つ方法には口伝があるというが、詳細は不明である。
* その他に、「法會の伝」という、香を聞く作法や香炉の扱い方、灰の押し方や筋目の付け方に秘伝があるという。そのため、本書には記さないでおくということである。灰の筋目には「陰」と「陽」があるが、ここはやはり「陰」を指示したものでらう。

また、記録の方法も、連中の人数によつて様々に異なるという。この「法會の伝」と玉鬘香の「衣配りの伝」は秘事であり、直接の口伝でなければ伝授できないということである。

この「法會の伝」について、『秘記』には、わずかながら記述がある。香炉の足の向きや、前述の灰の押し方など、様々な細

かい秘伝があるという。口伝でなければ理解し難いことであるという点が、記述の最後に述べられる。香炉の足の向きは、あるいは通常の逆向きを指示するものか。

蘭之園本は、竹幽本と同様、本香として、客香「形見の梅」「形見の桜」各一包を用意するが、地香八包の名称は「法華八講」である。地香を八包用意するのは、「法華八講」の「八」にちなんだものだろうが、「法華八軸」とする竹幽本も、この点は継承している。なお、蘭之園本では、地香は五種類ほど、多いときは八種類も取り揃える。竹幽本が三種類であるから、蘭之園本の方が種類が多い。蘭之園本は、本香十包を一炷聞きとし、「形見の梅」「形見の桜」の香が何炷目に出たかを名乗紙に記す。地香は聞き捨てである。竹幽本は十炷香札を用いるため、蘭之園本とは答え方が異なる。用意する香の数は一致するものの、竹幽本は、蘭之園本にない組香の趣向を盛り込むという方向性を示している。

（2）『源氏物語』との関わり

本組香の「御法」とは仏法の敬称であり、香の名目「法華八軸」とは『法華経』八巻を指す。学僧が一日に二巻ずつ講じて四日間で終える法会が、蘭之園本の香の名目「法華八講」である。光源氏最愛の紫の上は四年前に発病して以来、全快せず、死期が迫っていることを悟り法華八講を催した。『源氏物語』には

紫の上が三月に「法華経千部、急ぎて供養」（④四九五頁）したと書かれている。その法会が終わった直後、名残惜しく思った紫の上が詠んだ和歌（④四九九頁）が巻名歌である。

夏になり暑さでますます衰弱した紫の上は、孫の匂宮を呼び寄せ、庭の「紅梅と桜」（④五〇三頁）を形見として譲ると話した。それが香の名目「形見の梅」「形見の桜」の由来である。そののち秋風が吹く中、紫の上は光源氏に看取られながら息を引き取った。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。

注

（1）三四六頁。

（2）『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）所収の第一系統第一類本による。蘭之園本がその系統によることは、すでに武居雅子氏が、『源氏千種香』の依拠本を探る」（『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月）で論考されている。

(3) 以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥(小学館、一九九四～一九九八年)により、その巻数と頁数を(一)を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。


(4) 注(1) 前掲書一〇三頁。

(5) 注(1) 前掲書一〇五頁。


(6) 注(1) 前掲書一〇四頁。

(7) 注(1) 前掲書三五頁。

若菜之香立物圖



柳 一本



松 一本

四季樹長
 人形配林
 羽ハシ

若菜之香記 一三除

| 本 | 松 | 柳 | 葵 | 菊 | 菖蒲 | 芍薬 | 薔薇 |
|---|---|---|---|---|----|----|----|
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 | 三 |
| 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 |
| 五 | 五 | 五 | 五 | 五 | 五 | 五 | 五 |
| 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 |
| 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 |

辛巳月

(二十三丁裏)

(二十三丁表)

若菜之香立物圖



翠簾 二層



鞠 一足

如三宮人形 一丁
 人形配林
 羽ハシ

若菜之香記 一四除



楓 一本



梅 一本

(二十四丁裏)

(二十四丁表)

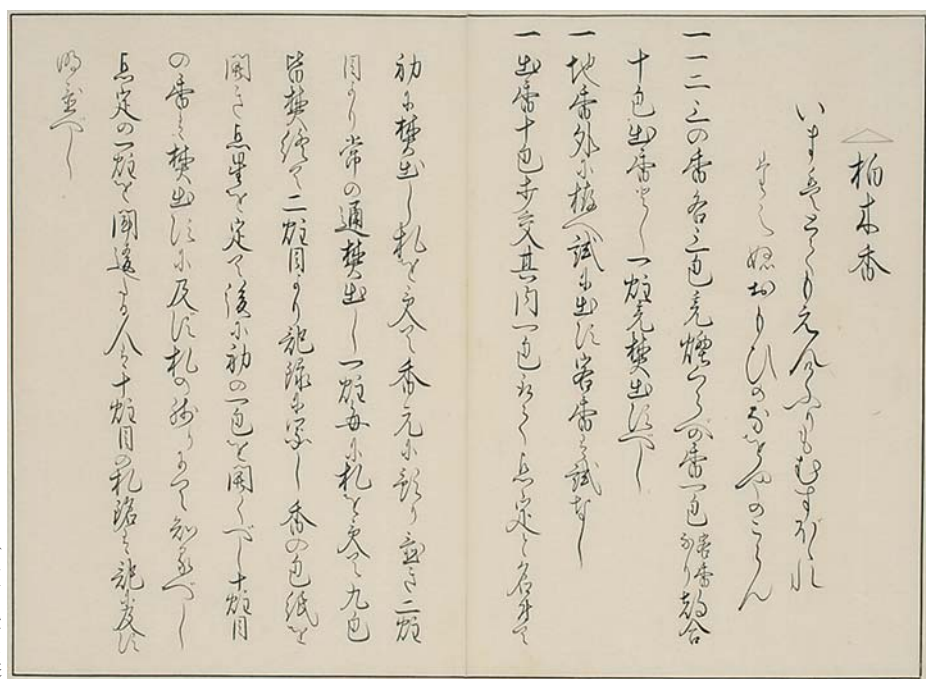
35

若菜下香

(二十五丁裏) 二十八丁裏。『社会科学』第43巻第3号参照。



(二十五丁表)



(二十九丁表)

(二十九丁裏)

| | | | |
|---|--|---|---|
| <p>一同席之色乃内一色一版中一色二色 其同席二版中一色一版中一色二色 矣</p> | <p>一礼歩種たる 但し同席より礼歩を不徳一二三ウヤ 格と龍は 一の香之色内</p> | <p>初小出る一色 中一色一色 末小出る一色 誰せう礼</p> | <p>二の香之色内 中一色一色 初小出る一色 末小出る一色 やの様の礼 荷種一の礼</p> |
|---|--|---|---|

(三十丁表)

(三十丁裏)

| | | | |
|---|--|--|---------------------|
| <p>一の香之色内 末小出る一色 初小出る一色 中一色一色 霞の衣の礼 山名様の礼</p> | <p>煙競の香一色 葉と神の礼 一礼歩を告独國四色二人より二色國遠里一 階より一版國独中一色二人より二色國遠</p> | <p>里より同席の二版國独中一色二人より二色 一版斗國より一色一版も小國遠より一色 一光階也も定の一版を國より一色も告獨人 も二色も告獨人より一色も告獨人より一色 残九版の香皆中一色も告獨人より一色 徳也</p> | <p>一礼一人拾数十人分百枚也</p> |
|---|--|--|---------------------|

(三十一丁表)

(三十一丁裏)

横笛香

うこふえのえ

むか〜むか〜むか〜むか〜

一試か

一十瓶香の札と圓の

一欠香より人落葉より人分

一琴の香瑟の香坐の香名四色光管香九色

二色同香也初合十七色の内十四色出香〜暗焚
紙〜色紙と圓〜

一出香五瓶光双より小分〜横笛出香瓶より二光双

小分〜一圓と廻り〜
ク香の札同座香
丸紙と色紙あり

欠香より〜圓より出香〜落葉より〜

不圓入落葉より〜圓より出香〜欠香より〜

不圓双の軍香出香列〜

(三十三丁表)

(三十三丁裏)

一横笛香二色光二色赤又其内二色陰名五色と一結

り〜欠香より初の出香〜人入残二色陰同二色陰

名五色と一結り〜落葉より初の出香〜落葉香

五色赤又〜同二色陰名砂四色で二色光分

り〜双より後の出香〜二色陰也横笛香二色陰紙

〜後の出香二色光と二色陰同小双より〜焚

出紙はきり

一初五瓶〜五瓶十瓶香の紙〜圓也琴香小札の瑟香小

横笛香小札の横笛小札の琵琶小札の〜

一後の出香双より二色光二色陰紙〜札〜二瓶

同香〜圓の横笛の札二瓶列香〜圓の琵琶の札〜

初五瓶の札〜二二の順〜〜〜札〜二瓶光分

紙〜史底小落〜〜札〜同名異名と分〜

〜〜同札二枚の同二枚残〜〜二色光陰〜香〜

(三十四丁表)

(三十四丁裏)

| | | | | | | | |
|---------|-------------|---|---|--|--|---|---------|
| (三十七丁表) | このりし香色紙で園く下 | 一 宝鏡十燈香の通々園く下このりし二色の月小客香 の力な紙園分とま一つとまこのりし二色の月小客香 一色紙の底小五版肉つ枝札と客と足む下 一 龍源總縁 | 香本くは巻の香と龍く下このりし二色の月小客香 この二色と正客との傍小客と出香の順縁とま下 | 札縁の小ふこのりし二色の月小客香と假名と龍く下客と其下 小園香の札縁とま下 | このりし札縁の小ふこのりし二色の月小客香と正客と 客と客其下小園香の札縁とま下 | 五版皆園中ふは客と客と二色札縁と一色札縁と 客二版とも小園く下このりし二色の月小客香と つとまか下 | (三十七丁裏) |
|---------|-------------|---|---|--|--|---|---------|

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|-------------------|--------|-------|-----------------|-------|--------|------------|------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---|---------|
| (三十八丁表) | 客二版園くこのりし二色の月小客香と | 一 龍源總縁 | 皆外 雨夜 | 客二版園 客二版園 月小客香と | 皆外 雨夜 | 一 龍源總縁 | 鈴虫香と龍 一二二除 | 鈴虫香と龍 一二二除 | 若松 心もて 一二二ウウ 鈴虫 二ウ 名月 | 花梨 心もて 一二二ウ 鈴虫 二ウ 名月 | 萬葉 心もて 一二二ウ 鈴虫 二ウ 名月 | 東藩 心もて 一二二ウ 鈴虫 二ウ 名月 | 月 | (三十八丁裏) |
|---------|-------------------|--------|-------|-----------------|-------|--------|------------|------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---|---------|

(三十九丁表)

夕霧香

山に雲あつれをわづる夕霧の香

ふり出んをふりかたむく

一十般香のれと目る

一々霧香將り入落葉宮方入合川夕霧香一と條の香と色一條の香と色小野の香と色中野香重母居の香と色中野香初合十也出香く皆替はる色紙と

関く巻

一地香と種も小外小松(並出香十般替はる色紙と

試小替はる色紙)

一双方背頂の定種も雨方の國敷のあふ小つり

夕霧と落葉とあ持の香を満座十合國敷

の多少とふく背頂とあ持の香を満座十合國敷

たのふく

(三十九丁裏)

(四十丁表)

一と條の香

初小替はる香

夕霧と種香也

一と條の香

初小替はる香

落葉と種香也

一と條の香

初小替はる香

双方の種香也

一國松と出香拾也と試十般香の通、國一、二、三
ウ、順で三、札と十色替はる色紙と試の二種
と替はる色紙と國一、二の札と、竹の香二の札
と、竹の香と、試小替はる香と、名紙と、名紙と

認種

一と條の香

一と條の香

小野香

重母居香

二の札

ウの札

一の札

三の札

名紙

一龍紙と札と名紙と、合て札と二の札と、名紙と
紙と、二の條の香と、國一、二の札と、龍紙と、龍紙と

(四十丁裏)

